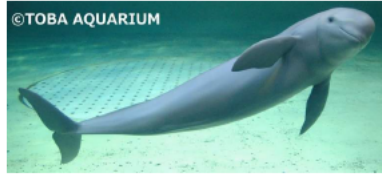


スナメリ 日本周辺

Narrow-ridged finless porpoise *Neophocaena asiaeorientalis*



管理・関係機関

農林水産省

生物学的特性

- 最大体長・体重：体長（頭頂～尾びれ分岐点）は2m程度
- 寿命：不明（35年を超える飼育記録あり）
- 性成熟年齢：雄3～9歳、雌4歳まで（太平洋岸・瀬戸内海の個体）、雄4～6歳、雌5～9歳（西九州沿岸の個体）
（雄ではすべての精細管で精子形成が観察されれば、雌では卵巣に少なくとも1つの黄体が観察されれば、性成熟に達しているとの判定に基づく）
- 出産期・繁殖場：春～夏・太平洋岸・瀬戸内海、秋～春・西九州沿岸
- 索餌期・索餌場：周年・日本の沿岸海域
- 食性：イワシ類、ハゼ類、イカナゴ、コノシロ、イカ類、タコ類、エビ類等
- 捕食者：ホホジロザメ、シャチ

利用・用途

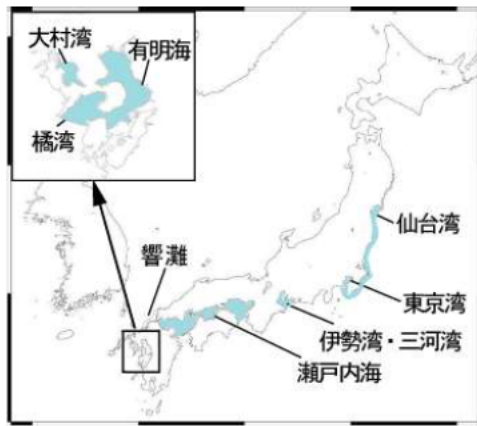
試験研究・教育展示等

漁業の特徴

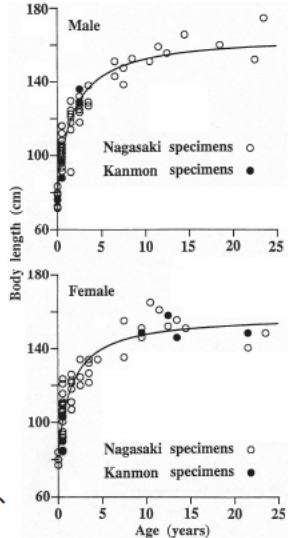
商業捕獲は行われていない。2020年12月1日より漁業の許可及び取締り等に関する省令（かつては水産資源保護法）に基づく採捕等禁止対象種である。

漁獲の動向

戦後の一時期、油を採取する目的で捕獲されたことがあった。また、水族館での展示に供するため、まき網による捕獲が行われたこともある。西九州の橘湾では、かつて小型定置網で多くの個体が混獲されていたが、漁法が変化して混獲は減少した。2003年の知見では、大村湾、有明海・橘湾では資源量推定値の1%程度が1年間に混獲されているとの推定もある。2004年11月に伊勢湾において、学術研究及び教育展示を目的に9頭の特別採捕が行われた。



日本におけるスナメリの主分布域 仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～響灘、大村湾、有明海・橘湾



スナメリの成長曲線
（上：雄、下：雌。長崎県・関門海峡周辺の個体より）

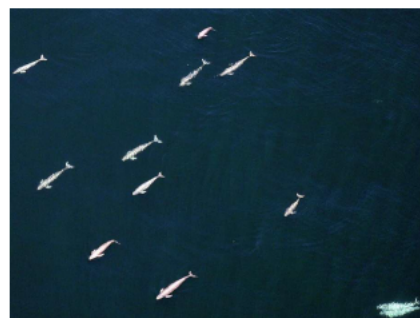
資源状態
<p>本種には日本周辺に少なくとも5つの系群が存在する。旧国際水産資源研究所（現、水産資源研究所）が実施した航空目視調査による資源量推定値は、仙台湾～東京湾系群のうち仙台湾～房総半島東岸：2,251頭（CV=39.1%、調査年は2005年、以下同様）、伊勢湾・三河湾系群：3,920頭（21.9%、2014年）、瀬戸内海～響灘系群のうち瀬戸内海：10,441頭（15.1%、2015年）、大村湾系群：168頭（39.3%、2012年）、有明海・橘湾系群：3,000頭（24.5%、2012年）となっている。仙台湾から房総半島東岸にかけての海域で東日本大震災後に行われた航空目視調査の結果、資源量は1,491頭（32.4%、2012年）と推定され、震災前に比べ資源量が減少したとの報告がある。一方、瀬戸内海では1970年代から2000年にかけて生息密度の減少と生息域の縮小が認められたが、近年の航空目視調査の結果によると、この傾向は止まった可能性がある。瀬戸内海では顕著に資源量推定値が増大したものの、伊勢湾・三河湾系群、大村湾系群、有明海・橘湾系群では優位な資源量の変化は見られず、仙台湾～房総半島東岸では東日本大震災後に資源量の減少が報告され、生息環境の脆弱性が考えられる。以上、5系群全体としては2000年代初頭以降より推定資源量ないし生息密度に有意な変化が見られなかったことから現在の資源水準を中位、資源動向を横ばいとした。ただし、大村湾については、資源量推定値が数百頭程度と小さく、生息環境の変化の影響を受けやすいと考えられることから資源水準を低位とし、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域では震災の影響により資源動向を減少とした。</p>

管理方策
<p>商業捕獲は行われていないが、混獲が発生している。混獲数の把握に努めるとともに、混獲を減らす努力が必要である。本種の生息域はいずれも人間活動の盛んな場所であり、海砂の採取等が過度に行われれば、生息域の縮小や分断を招く恐れがある。瀬戸内海では海砂の採取による生息域の分断化の可能性が指摘されている。また、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域では、東日本大震災の影響による生息環境の変化も懸念される。目視調査を通じ、資源量・分布状況の変化等について情報を収集する必要がある。</p>

スナメリ（日本周辺）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 (最近5年間)	詳細は不明、各地で混獲あり
我が国の漁獲量 (最近5年間)	商業捕獲はないが混獲あり (19.4頭/年：2018～2022年の旧国際水産資源研究所 (現、水産資源研究所) とりまとめによる)
資源評価の方法	主として航空目視調査データによる資源量推定に基づく
資源の状態 (資源評価結果)	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台湾～東京湾系群のうち仙台湾～房総半島東岸：1,491頭（CV=32.4%、2012年） ・伊勢湾・三河湾系群：3,920頭（21.9%、2014年） ・瀬戸内海～響灘系群のうち瀬戸内海：10,441頭（15.1%、2015年） ・大村湾系群：168頭（39.3%、2012年） ・有明海・橘湾系群：3,000頭（24.5%、2012年） 瀬戸内海では顕著に資源量推定値が増大したものの、伊勢湾・三河湾系群、大村湾系群、有明海・橘湾系群では優位な資源量の変化は見られず、仙台湾～房総半島東岸では東日本大震災後に資源量の減少が報告され、生息環境の脆弱性が考えられる。 以上、5系群全体としては2000年代初頭以降より推定資源量ないし生息密度に有意な変化が見られなかったことから資源水準は中位・資源動向は横ばいとした。
管理目標	現在の資源水準を維持 (仙台湾から房総半島東岸にかけての海域ではもとの水準への回復)
管理措置	水産資源保護法施行規則（2020年12月1日より漁業の許可及び取締り等に関する省令）の対象種 商業捕獲は禁止
管理機関・関係機関	農林水産省
最新の資源評価年	未実施
次回の資源評価年	未定



航空目視調査に使用される小型固定翼機



小型固定翼機から見たスナメリ（撮影：南川真吾）